

二〇二二年度

第二回 入学試験問題

国語（五十分）（全十二ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「僕（空知）」は、美術大学三年生の時、仲間の次郎と共に行ったオーストラリア・メルボルンで、一枚の絵と出会った。「ジャック・ジャクソン」という画家が描いたその絵に心を奪われていると、その場に座っていた青年が「僕が描いたんだ」と話しかけてきた。

X

ただどひとつだけ、僕には納得のいかないところがあった。

彼のアーツ・センターの絵は、くすんだ銅色のチープな額縁に収まっていた。上部中央にハート形のパーツがひとつ、所在なさげにくっついていて、廃棄寸前の適当なものが使いまわしされているとしか思えなかった。

古ぼけたそのフレームをあらためて見て、僕はやるせない気持ちになった。憤りさえ感じた。この素晴らしい絵が、どうして①こんな目に遭わなきゃいけないんだ？

この絵には、これよりもふさわしい額縁があるはずなのに。もっともっと、大切に扱われるべき作品なのに。

「このフレームは？」

僕が控え目に質問すると、ジャックはちよつと苦笑した。本人も気に入ってはいないらしいかった。

「店の倉庫にあったのを使わせてもらってるんだ。僕の絵が、ずっと居心地よく過ごせるようなフレームと出会えたらいいんだけど」

そこに数人の女性客が入ってきて、早口の英語で店主と話し始めた。ジャックも店主に呼ばれて、何か込み入ったことを相談されている。腕時計を見ると、次郎との待ち合わせ時間が迫っていた。もう行かなくてはならない。

困ったような顔で話し込んでいるジャックに声をかけるのも申し訳なく、僕はAを引かれながら店を出た。

ジャック・ジャクソン。その名前を僕は頭の中で復唱した。何度も。帰国後、僕はあの1がどうしても忘れられなかった。そしてそれとセットのように、あの2が思い出されるのだった。彼の絵の魅力をもっと引き出せるような額をつけてあげられたらいいのに。小さいころからずっと絵が好きだったけど、額縁の「存在」をこんなにちゃんと認識したのはそのときようやくのことだったかもしれない。

大学では、額装に関するちゃんとした授業なんてなかった。自分で描いた作品も、キャンバスのまま壁にかけることのほうが多かった。

額縁に強い興味を持った僕は片っ端から美術館に足を運び、じっくり見て回った。どんな額だったらジャックの絵に合うのだろう。額職人はどんなふうの絵に額を添わせてきたのだろう。そうしているうち、いつしか、3よりも4に夢中になっていた。

額職人によって手掛けられたそれらはふたつとして同じものではなく、

それぞれに、それぞれの②表情があつた。フレームの太さ、厚み、形状、色合い。施された彫刻や模様。額縁が違えば絵の印象もまったく違つた。しかし不思議なのは、いくら豪華絢爛な作りの額縁でも、やはり目がいくのは絵のほうだということだった。

でもそれは錯覚かもしれない。僕たちは絵に魅入られながら、確かに額縁も見ているのだから。出しゃばらずに絵を引き立てる、見事な調和。

③芸術的でありながら、密かに計算されつくしている。おもしろい。

額縁を、作つてみたい。僕がいつか、この手でこんなふうな額縁を手掛けてみたい。そんな思いがふつふつと湧いていた。

そして就職活動の末「アルブル工房」にたどりつき、僕は額職人をめざすことを決めた。ジャックの絵との出会いが、僕に絵から額へと舵を切らせたのだ。

僕には予知能力はないけれど、大きな確信があつた。ジャックは間違はなく、画家として大成する。あんな絵が、あんな人が、あそこで埋もれたままのはずはないと思つた。

ジャックが立派な画家になつたときには僕も、胸を張つて額装を引き受けられるような熟練の額職人でありたい。

確かにそう思つたんだ。そのときは――。

三十歳になつた「僕」は、額職人として仕事を続けることに疑問を持ち始めていた。そんなとき、額装依頼リストの中に『「エスキース」ジャック・ジャク

ソン」の文字を見つけ、「僕」はジャックの絵と奇跡的な再会を果たした。「僕」は「アルブル工房」の経営者の村崎さんにジャックの絵の額装を申し出、許可される。

『「エスキース」と題されたその絵は、二十歳ぐらいの女の子が描かれた、胸から上の人物画である。「僕」は、ジャックの絵にふさわしい額装のデザインや素材を考えた。デザインは、描かれた女の子が胸にしていたブローチに合わせ、鳥の羽根を彫ることに決め、木材は桜を使うことに決めた。

Y

デザインが固まると、僕は木材の切り出しに取り掛かつた。

絵のサイズはB4。額と絵の間に距離をつけるための、マットボードの幅を考慮に入れつつ、額竿の長さを決めていく。縦の人物画だから、安定して見やすいように天地の幅を左右より少し広げたい。ここでの細かい計算が全体の印象に響く。

電動ノコギリやかんなを使って木地を作り込みながら、僕は無心になつた。

なんの加工もしていない木と向き合っていると、彼らが息をしているのがわかる。

反りやねじれ、シミ、節。どの木にも、どこをどう切り取つても、ひとつひとつに個性があつた。

そうだ、木つてそれぞれにクセのある生き物だつたんだ。僕たちと同

じように。

僕はあらためてこの工房の名前を想った。

アルブル。フランス語で、「木」。

なんてふさわしい。そのかぐわしい香りに包まれながら、④僕は桜の木をそつと撫なでた。

時々、村崎さんにチェックしてもらいながら、僕は時間と手をかけて木地を成形し、寸法に合わせて慎重しんちょうに枠わくを組んだ。【イ】

額の全容が見えてきて、ほっとする一方で新しい緊張きんちようが生まれる。

鳥の羽根の彫刻。かなり重要なポイントだった。ここでそぐわない細工さいくをしたら、すべてが台無しになってしまう。僕は図鑑ずかんや画集をいくつもめくり、いろんな種類の羽根を研究した。どんな羽根をどんなふう彫うっていくか……。

ジャックと過ごしたわずかなひとときを、思い出から手繰り寄せる。

あのとときジャックが楽しそうに僕に教えてくれた、ペインティング・ナイフの技法。

スクラッチ、スクラッチ。

……そうだ、スクラッチだ。彫刻刀で立体的に彫り込むんじゃないかと、ニードルで削り描かくんだ。主張は抑えめに、でもエレガントにキユートに。四隅よすみで舞うエアリーな羽根たちは、女の子が隠かくし持っている痛みをやわらかく包んでくれるだろう。

自分でも驚おどろくぐらいに順調だった。羽根を刻み、ペーパーをかけ、

なめらかな木地が出来上がっていく過程を僕は充実じゆうじつした気分を進めた。

最後は、箔押しおろはくをして仕上げだ。僕は箔が収まっている引き出しをひとつ開け、和紙に包まれた箔をそつと取り出した。

箔には、本金箔ほんきんぱくを筆頭に、本銀箔、真鍮箔しんちゆう、錫箔すず、アルミ箔、黒箔、プラチナ箔……いろいろな種類がある。【ロ】

純金じゆんきんの本金箔ほんきんぱくを使おうと決めていた。高額でもそれが王道だし、予算のことは心配するなと村崎さんも言ってくれた。なんといつても、これだけ思い入れがあるのだ。最高の輝かがやきを授けたかった。

でも、本金箔ほんきんぱくを包んでいる和紙を開き、ゴールドのまぶしさを目にしたときに手が止まった。【ハ】

あの絵を魅力的に見せるために、これがベストだろうか？

僕は金箔きんぱくに和紙をかぶせ、思案した。

もつとシツクなたたずまいにするために、銀箔にするか。そもそも箔押しをせずに、無垢むくな木の素朴そぼくさを残したままのほうがいいのか。

違う、やっぱりここは本金箔だ。僕たちが再会した奇跡を祝したい。いや、でも……。

⑤考えれば考えるほどわからなくなっていく。

自分で絵を描くときの葛藤かつどうや迷いとは異なるものだった。どこまで僕のやりたいようにやっていたらいいんだろう。

次郎が言っていた。額なんか作っちゃって、絵ばっかり注目されて空知

の名前が表に出ることはないんだろ？

その通りだ。だからこそ、⑥僕の想いだけでも強く注ぎ込みたかったのかもしれない。

だけど……それは、額職人として本当に作品に寄り添うということだろうか？ 画家の気持ちを見無視することになるんじゃないだろうか？

額は絵よりも前に出てはいけない。僕が額で、ジャックが絵だ。

ジャックなら。

ジャックなら、どんなことを望む？

——僕の絵が、ずっと居心地よく過ごせるようなフレームと出会えたら……。

あのとときの彼の声が、遠くから響いてくる。はっきりと心が定まった。

使うべきは本金箔じゃない。光が強すぎて、この作品がそっと抱いて

いる灯をかき消してしまう。

この絵にぴったり似合うのは……。

僕は本金箔を包み直してしまい、迷わず別の引き出しを開けた。

真鍮箔だ。僕はそう確信する。【二】

真鍮箔は一見、金に見えるけれど、銅と亜鉛で作られている。その配合によって、色味が少しずつ違う。

引き出しから取り出した、真鍮箔三号色、青口。

亜鉛の配合が若干多めの、青みがかった金色。クールな輝きを持つ

その色は、女の子のぬくもりを引き出してくれるだろう。

膠を使い、息をするのも忘れそうなほどの集中力で箔を押ししていく。

極薄の脆い箔が吸いつくように木と同化するたび、僕はジャックとの不思議な一体感を覚えた。

彼がここにいなくても、何年も会っていないけれども、今、僕は間違いなく彼と一緒にこの額を作っている。【ホ】

次郎の言うように、力の限り魂を入れ込んだって、額職人の名前が表に出るわけじゃない。どんなに考え抜いたか、どれだけ時間と愛情をかけたかなんて、そんなことは誰にもわからない。だけど。

僕が知ってる。

唯一無二の、この素晴らしい額を生み出したのが僕だってことを。

それが僕の大きな誇りだ。それでいい。

ああ、僕は今、なんて幸せな仕事をしているんだろう。

待っててくれよ、ジャック。

僕は、百年先もこの絵を守る額を完成させてみせる。

(青山美智子『赤と青とエスキース』より)

なお、本文には省略等があります。

- *1 アーツ・センター……メルボルのシンボルになっているタワー。
- *2 チープ……安っぽいさま。
- *3 所在なさげ……することがなくて退屈なさま。
- *4 額装……絵を額に入れて仕上げること。
- *5 額竿……額縁の縁取りにあたる棒状の部分。装飾をほどこす。
- *6 天地……上部と下部。
- *7 ペインティング・ナイフ……画面に絵の具を塗るため用いる金属製の特殊なナイフ。かつてメルボルンで会ったジャックは、絵の描き方をたずねた「僕」に、「スクラッチ、スクラッチ……」（ひっかく、削り取る、の意）と言いながら、画用紙に塗られた絵の具をナイフでスクラッチし、絵を創り出して見せた。
- *8 ニードル……先が針のようになった道具。
- *9 箔押し……金や銀の箔を表面にはりつけること。
- *10 膠……ここでは、接着剤として用いられている。

問一 —— 線①「こんな目」とはどのようなことですか。本文中の言葉

を使って、解答欄に合うように十五字程度で答えなさい。

この素晴らしい絵が、【十五字程度】と。

問二 次の意味を参考に、Aに入る言葉として適当なものを、あと

のA～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

意味…「心残りがして思い切れないこと」

ア 後ろ足 イ 後ろ髪 ウ 後ろ指 エ 後ろ姿

問三 1と4に入る言葉の組み合わせとして適当なものを、次

のA～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	1	額	2	絵	3	額	4	絵
イ	1	額	2	絵	3	絵	4	額
ウ	1	絵	2	額	3	絵	4	額
エ	1	絵	2	額	3	額	4	絵

問四 —— 線②「表情」を言い換えた表現を、Yの本文中から漢字二字

で抜き出さない。

問五 —— 線③「芸術的でありながら、密かに計算されつくしている」

とはどのようなことですか。適当なものを、次のA～Eの中から一

つ選び、記号で答えなさい。

ア 額縁は、芸術作品として、絵の印象を変えるための工夫が細かくなされているということ。

イ 額縁は、芸術性を持ちつつも、絵が引き立てられるようにデザインされているということ。

ウ 絵は、額縁のありなしに関わらず、不動の価値を持つ芸術作品として評価されているということ。

エ 絵は、それ自体に価値があるのに加え、あとからつけられた額縁の芸術性をも高めてくれるということ。

問六 ——線④「僕は桜の木をそつと撫でた」から読み取れる「僕」の

心情として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふがいなさ イ やるせなさ

ウ いとおしさ エ あどけなさ

問七 ——線⑤「考えれば考えるほどわからなくなっていく」とありま

すが、何がわからなくなっていくのですか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように二十字程度で答えなさい。

【二十字程度】ということ。

問八 ——線⑥「僕の想い」とありますが、ここでの「僕の想い」とは

どのような想いですか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように二十字程度で答えなさい。

ジャックの絵を飾る額縁に【二十字程度】という想い。

問九 次の一文は本文中の【イ】・【ロ】・【ハ】・【ニ】・【ホ】のいずれか

に入ります。どこに入れるのが適当ですか。イ～ホの中から一つ選び、記号で答えなさい。

他人の靴を履き違えたときのような、おさまりの悪い違和感を覚える。

問十 次のア～エは、本文を読んだ後に生徒たちが語った感想です。本

文の内容を正しくとらえているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最後に「僕」は「力の限り魂を入れ込む」ことをあきらめて、

本金箔ではなく、真鍮箔を使うという決断をしているね。迷いの残る決断だったけれど、それが結果として作品と画家の想いに寄り添うことになったのには一安心したよ。

イ 「僕」は様々な場面で記憶の中のジャックを思い出している。

その過程で、「僕」の中にはジャックの理想像が出来上がったんだね。「僕」もジャックに負けないよう、額作りに誇りを持つという

という気持ち芽生えてきていて、応援したくなったよ。

ウ 額職人としての悩みを抱えていた「僕」だったが、ジャックの絵の額装をすることで、自分の名前を後世に残せる額職人という仕事は最高のものだと考えられるようになっていくね。これからもやりがいを持ち続けてほしいな。

エ 「僕」は自分の想いを注ぐよりも、作品と画家の想いに寄り添おうと心に決めて、額縁の最後の仕上げにとりかかるとね。額と絵が調和することと、「僕」がジャックとの不思議な一体感を覚えたこととは、つながっているように感じたよ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人が生きている世界——私はこれを「体験世界」と呼んでいます——は、①その人がいろいろな「可能性」をもつことで成り立っているのです。

(中略)

ところで、ここで言う「可能性」とは、いわゆる「実現可能性八〇パーセント」というような確率のことではありません。「こういうことをしたい」、そして「それはできるはず」と思っている、ということですね。簡単に、「したい・かつ・できる」という確信のこと、と言っているでしょう。

私はこの可能性を、単なる確率と区別するために「生の可能性」と呼んでいます。人は、「したい・かつ・できる」という「生の可能性」を信じ、それをめがけて生きているのです。

では、②「生の可能性」には、どんな種類があるのでしょうか。主なものとして、三つを挙げることができると思います。

一つ目は、友人や恋人、家族のような「親しい人たちとの関係」です。自分のことを受け入れてくれてるし、自分もその人たちのことが好きである。そうした関わりは、人が生きるうえで重要な「生の可能性」であり、喜びの源泉になりうるものです。

二つ目は、仕事やボランティアなどの「社会的な活動」です。自らの

エネルギーを夢中になって發揮して何かの形にしていくことは、充実感につながります。そして、その活動や成果をまわりの人が受けとめて、喜んだり評価したりしてくれることは、大きな喜びでもあります。ですので、こういった「社会的な活動」もとても大きな「生の可能性」となります。

三つ目は、「趣味や楽しみ」から受け取る喜びです。親しい人たちとの関係や社会的な活動だけでなく、こうした喜びも人間にとって重要なものです。打ち込んでる趣味だけでなく、お気に入りのカフェで読書する、というようなささやかな楽しみも人にはあります。

三つのうち、自分が生きるうえでどこに重きを置いているか、ということは人によって違うでしょう。そして、どんな人も、重要な「可能性」だけでなく、ささやかな「可能性」ももっていて、それらすべてによって生きているのです。

(中略)

さて、「生の可能性」とは、「こういうことをしたい」「かつ「それはできるはず」と信じていることを指す、と述べました。つまり、「したい」と「できる」という二つの要素によって、生の可能性は成り立っていることとなります。この二つについて、もう少し詳しく考えてみましょう。まず、「したい」という要素は「欲望」と言い換えられます。「したい」ということがなければ、そもそも自分のめがける生の可能性にはなりません。しかしまた、いくらあることがしたかったとしても、そう「でき

「能力がなかったり、そのために必要なお金や時間が不足していれば、それは生の可能性として成り立ちません。この「できる」という要素を、ここでは「資源・能力」と言い換えてみたいと思います。

人がお金や時間などの資源を求めるのは、それがさまざまな「できる」を拓いてくれるからです。お金がないと、生の可能性をかなり狭められた範囲でしか描けなくなってしまう。

また、資源にはAジンミヤクを含めることもできます。人に知恵をBかりたり助けてもらったりできる、ということは、ときにはお金よりも大切なものとなります。ともあれ、このような資源があつてはじめて、私たちは「〜できる」と信じていることができます。

③もう一つ大切なものが「能力」です。能力といえはまず、歩ける、見ることができ、聴くことができる、などの身体能力を挙げることができます。これらの身体能力は、私たちの活動を支える土台になっている、という意味で、基礎的な能力とすることがあります。

ふだん私たちは、当たり前のように歩いたり電車に乗ったり、見たり聞いたり触ったり味わったりしていますが、これらの身体能力のどれかが損なわれると、それに伴ってさまざまな可能性が削られたり失われたりします。学校やCシヨクバに行ったり、友だちと遊びに出かけたりするような活動全般が、一定程度の身体能力を土台として成り立っているからです。

また、能力には身体能力だけでなく、英語が話せる、資料を読み適切

にまとめることができる、などの、後天的に獲得できるものがあります。このような「できる」が増えると、新たな活動のDリヨウイキが広がっていきます。

たとえば英語が話せるようになると、それまで旅行に興味がなかった人でも、いろんなところに行きたくなるかもしれません。新たな能力の獲得は、新たな欲望をEハグクむことにつながるのです。それとは逆に、欲望があるから能力を増大させようとすることもありませぬ。英語を身につけて世界に出かけていきたい、だからこそ勉強に励む、というように。

(中略)

しかし人生には、自分がいくら頑張っても思うようにできないことがあります。たとえば、中学生になり野球部に入部して、一生懸命努力する。でも、どんなに努力しても、あいつには敵わない。彼にできることが、自分にはどうしてもできず、レギュラーにもなれない。それが悔しく、苦しい。そんな経験をしたことのない人はいないのではないでしょうか。

自分には決定的に才能がないなあ、と思い切ることができたなら、楽になれますが、そうでないときにはじつに苦しい思いをするかもしれません。

能力の差がハッキリわかるくらい大きいと、人はあまり苦しみませぬ。素直に「あいつはすごいなあ。自分も教えてもらいたい」と思うことも

あります。

しかし、手が届きそうなのに届かない。そしてほんのわずかの差し加えないはずなのに、あいつは手が届いた。そんなとき「なぜ自分ではなく、あいつがレギュラーなんだ」と思う。現実はどうしても納得できないのです。そのとき人は、「あいつ」に才能を与えた運命を呪ったり、ときには嫉妬して、「あいつ」の失敗を願ったりするかもしれませぬ。

(中略)

生きていれば誰もが、この「欲望と能力のバランス」という問題に突き当たります。④へどんな人も、欲望と能力をめぐるドラマを生きている。これは、最初におさえておきたい大きなテーマです。

(中略)

*
ここでもう一度、⑤人間はなぜチンパンジーと違うのか、を考えてみたいと思います。

先に述べたように、チンパンジーは「いま・ここ」を生きる存在です。

チンパンジーは「これから」もずっと食べていけるかと考えませぬ。

「いま・ここ」で食えることができれば、それでいいのです。

チンパンジーに関する有名な実験で、こんなものがあります。

チンパンジーの手が届かないところにバナナを吊るしておく、まわりにある椅子や机を自分で積み上げ、登って取ることができそうです。

一、道具を使いこなすことのできる高い知能をもっているわけですが、そのときの目的(バナナ)も、そのための手段(椅子や机)も、「い

ま・ここ」にあつて目に見えています。

二 人は、目に見えない目的、つまり未来の目的をめざすことができます。数年後、数十年後の目に見えない目的を思い描いて、そのために努力し、そのための手段を積み上げていこうとするのです。これは人間にしかできません。

三 なぜ、人間は「いま・ここ」ではない世界のことを考えることができるのでしょうか。ここでキーワードになるのが、「言葉」です。

人は言葉を獲得したことで、他者に複雑なことを伝えることができるようになりました。もともと言葉は、コミュニケーションのための手段として生まれてきたものでしょう。しかしそれは、人間の体験世界そのものを大きく変容させる力をもっていたのです。なぜなら、言葉には、「いま・ここ」を離脱させる力があるからです。

四 人は、言葉を使うことで、想像の世界をつくりだすことができます。人は三歳くらいになれば、冒険のお話を読んでもらって、ドキドキしたり、喜んだり笑ったりすることができます。でもそのお話の中心は「いま・ここ」に存在するものではありません。想像力のつくりだしたものです。

言葉をもつことで、人はさらに、はるかな過去を語り、はるかな未来をつくりだすことができます。過去や未来のような、「いま・ここ」にないものを、人はつくりだすのです。こういったことは、言葉をもたない生き物にはできません。

そして人間は、どんな人であっても、ある過去を経て、現在に至り、そして未来をめぐけようとする。つまり、その人なりの「人生の物語」を形づくりながら生きていくことになります。

そして誰かと親しくなっていくときには、そんな自分の物語を少しづつ語っていくことになるでしょう。幼いときに感じたことや、学校生活でうれしかったことや、これからの夢も語るかもしれません。

「これまでこうやって生きてきて、そのなかでいろんなことを感じて、現在に至っている。そして、これからはこんなことをしていきたい」という人生の物語を、一人ひとりが言葉によってつくっていきます。そして、その物語を誰かに語ることで、自分の人生の「これまで」と「これから」をあらためて確認することもあります。

ときには自分にこのように言い聞かせることもありますね。「私はこういうことをしたいと思っていたんだ。だから、ぼんやりしている場合じゃない。もっと前向きに進まなくちゃ」と。

このように、人は自身の「生の可能性」を気づかう存在であり、欲望と能力をめぐるドラマを生き、⑥過去から未来に向かう「物語」を生きるのです。

(西研『しあわせの哲学』^{てつがく}より。なお、本文には省略等があります。)

* ここでもう一度……筆者は本文の前で、「人間」と「チンパンジー」の違いを取り上げている。

問一 —— 線①「その人がいろいろな『可能性』をもつ」とありますが、筆者はこのような「可能性」のことを、どのように言い換えていますか。本文中から二十字で抜き出しなさい。

問二 —— 線②『生の可能性』にはくできると思います」とありますが、筆者は「生の可能性」の「三つ」の種類を示すことでどのようなことを言いたいのですか。最もよく表している一文を本文中から探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問三 —— 線③「もう一つ大切なものが『能力』です」とありますが、筆者はこの「能力」を二つ挙げています。具体的にどのような「能力」のことですか。本文中の言葉を使って、それぞれ二十字以内でまとめなさい。

問四 —— 線④「どんな人も、欲望と能力をめぐるドラマを生きている」とは、どのようなことですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は誰でも他人との能力の差が大きいとあきらめてしまい、自分の欲望を捨ててしまうということ。

イ できることだけに専念して能力が高まると、人は誰でも能力以上の欲望を抱こうとすること。

ウ 努力しても自分の能力が伸びないと、人は誰でも自分の欲望を隠してしまおうとすること。

エ 人は誰でも自分の能力の限界と欲望を、自分なりにうまく調節しながら生きているのだということ。

問五

□一・□ロ・□目・□クに入る言葉を、次のア～エの中

から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ しかし ウ つまり エ では

問六

——線⑤「人間はなぜチンパンジーと違うのか、を考えてみたい」とありますが、筆者は「チンパンジー」と「人間」を、どのような存在だと考えていますか。次の文の空欄に合うように、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

筆者は、チンパンジーを「1 十一字」存在だと考え、人間を

「2 十二字」をつくりだすことができる存在だと考えている。

問七

——線⑥「過去から未来に向かう『物語』を生きる」とは、どのようなことですか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように、七十字以内で答えなさい。ただし、「言葉」と「人生」は必ず使いなさい。

人は「七十字以内」ということ。

問八

——線A「ジンミヤク」・B「カ(り)」・C「シヨクバ」・D「リヨウイキ」・E「ハグク(む)」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。